

徒然草「猫またといふものありて」 古語・現代語訳・品詞分解を解説

徒然草「奥山に猫またといふものありて」あらすじと現代語訳

「奥山に猫またといふものありて」は兼好法師の作品「徒然草」の一節（第八十九段）。

「奥山に猫またといふものありて」原文

「奥山に猫またといふものありて、人を食らふなる。」と人の言ひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の経上がりて、猫またになりて、人取ることあるものを。」と言ふ者ありけるを、何阿弥陀仏とかや、連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが聞きて、ひとりありかん身は、心すべきことにこそと思ひける頃しも、ある所にて夜更くるまで連歌して、ただひとり帰りけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫また、あやまたず足もとへふと寄り来て、やがてかきつくまに、首のほどを食はんとす。胆心もうせて、防がんとするに、力もなく、足も立たず、小川へ転び入りて、「助けよや、猫またよやよや。」と叫べば、家々より松どもともして走り寄りて見れば、このわたりに身知れる僧なり。「こはいかに。」とて、川の中より抱きおこしたれば、連歌の賭け物取りて、扇、小箱など懐に持ちたりけるも、水に入りぬ。稀有にして助かりたるさまにて、はふはふ家に入りけり。飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

「奥山に猫またといふものありて」現代語訳

「奥山に、猫またというものがいて、人を食うそうだ。」と人が言ったところ、「山ではないけれど、このあたりでも、猫が年月を経て変化して、猫またになり、人（の命）をとることはあるそうだなあ。」と言うものがいたのを、なんとか阿弥陀仏とかいう、連歌をして（生活を立てて）いた法師で、行願寺の近くに住んでいた法師が聞いて、一人歩きをする身としては、気をつけなければならないことだと思って、いたちようどそのとき、ある所で夜更けるまで連歌をして、ただ一人で帰ったが、小川の縁で、うわさに聞いた猫またが、ねらったとおりに足元へ不意にやってきて、すぐさま飛びつくと同時に、首のあたりを食おうとする。（法師は）正気も失って、防ごうとするが、力も出ず、（腰が抜けたので）足も立たず、小川へ転がりこんで、「助けてくれ、猫まただあ、おおい、おおい」と叫ぶと、家々からたいまつをともして（人々が）走り寄りて見ると、このあたりで見知っている僧である。「これはどうしたのだろうか。」と言って、川の中から（法師を）抱き起こしたところ、連歌の賞品を取って、扇、小箱など懐に持っていたのも、水に浸かってしまった。なんとか助かったという様子で、はうように家に入ったのであった。

（実は）飼っていた犬が、暗いけれど主人を見分けて、飛びついたのであったということだ。

※（ ）の言葉は、原文には書かれていないけれど、文の意味をわかりやすくするために付け加えているよ。



「奥山に猫またといふものありて」あらずじ(ざっくり口語訳)

奥山に猫またというのがいて、人を食べるそうだ。山でなくたって、長生きした猫が猫またになって人を食べることもあるという話を聞いていた僧は、ある夜遅く、連歌の帰りに1人で帰ることになった。すると小川の縁で、なんとうわさに聞いていた猫またが不意に飛びつき首のあたりを食べようとする。腰も抜け、正気を失った僧は小川へ転がり込み助けを呼ぶ。連歌の賞品は水に浸かってしまったものの、人々に抱き起こされなんとか助かった僧は這うように家に入る。実は飼っていた犬が飛びついただけだったそうだ。

徒然草「奥山に猫またといふものありて」古語の意味

テストでは、「奥山に、猫またといふものありて」の中で使われている古語の意味を聞かれることも多いので、それぞれよく確認しておこう。

※古語にはいくつか違った意味を持つものがありますが、この表では「奥山に、猫またといふものありて」で使われている意味を紹介しています。

あなり	あ・なり（発音は「あんなり」） あるということだ。あるようだ。 【本文】人取ることはあなるものを
…を	いろいろな語につく接続語。文末に使い、「…なあ。」という感動や詠嘆の意味を持たせる。 【本文】人取ることはあなるものを
経上（へあ）がる	年月を経て変化する 【本文】猫の経上がりて、猫またになりて 昔の日本では「山の中にいる猫また」と、「人に飼われている猫が年老いて化けて「猫また」になったもの」がいると考えられていた。
連歌（れんが）	複数の人が集まって、リレー形式に和歌を詠むゲームのようなもの。上の句と下の句を交互に詠み重ねて行って、新しい作品を作る。景品などが用意されることもあった。
何阿弥陀仏 （なにあみだぶつ）	「何」は、僧の正しい名前を思い出すことができないので、「なんとか」という意味で使われている。 つまり「ナントカ阿弥陀仏とかいう僧」というイメージ。
心す	気をつける。注意する。用心する。 【本文】心すべきことにこそと思ひける頃しも
頃しも	ちょうどそのころ。 【本文】心すべきことにこそと思ひける頃しも
あやまたず	「過たず」と書く。まちがいなく。ねらったとおりに。 【本文】あやまたず足もとへふと寄り来て



やがて	すぐさま。ただちに。
胆心（きもごころ）	「きもごころ」とも読む。胆と心のこと。精神。正気。 【本文】胆心もうせて、防がんとするに
よや	間投助詞「よ」＋間投助詞「や」 人に強く呼びかける語。おおい・よう 【本文】助けよや、猫またよやよや
松	松明（たいまつ）のことを略した語。 松明とは、手で持てるようにした火のついた木切れなどのこと。 燃えやすい松脂（まつやに）を浸した布きれを巻きつけて使う。
いかに	「如何に」と書く。形容動詞「いかなり」の連用形「いかに」からできた語。どんなふうに・どのように
希有（けう）	めずらしいこと。めったにないこと。不思議なこと。 【本文】希有にして助かりたるさまに めずらしく助かったということは、「なんとか助かった」「奇跡的に助かった」というイメージ

徒然草「奥山に猫またといふものありて」テスト対策ポイント

「奥山に猫またといふものありて」のテストでよく問題にされるポイントを確認しよう。

どうして僧は「ひとり歩かん身は、心すべきことにこそ」と思ったのか？

「ひとり歩かん身は、心すべきことにこそ」とは、「1人歩きする身としては、気をつけなければならない」と思ったと言うことだね。

僧はどうしてこう思ったかという、と、「奥山に猫またという人を食う妖怪がいる」ということを聞いて、さらにその猫または「山ではない、このあたりにも出る」ということを聞いたからだね。

「このあたりにも猫またが出るなら、1人で歩く自分は猫またに襲われないように気をつけなければならない」と思ったということだね。

理由を答える問題だったら、「このあたりにも猫またが出るという話を聞いたから」が答えだね。

猫またの正体はなんだったのか？

この法師を襲ったのは本当に猫ただったのかな？

最後の一文「飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、とびつきたりけるとぞ。」というのを見てみよう。

そう、「飛びついた」のは僧が飼っていた犬だったというオチだね。

テストの問題では「猫またの正体を本文から書き抜きなさい」という形で出ることが多いよ。



答えは「飼ひける犬」だね。

この「奥山に猫またといふものありて」のお話のテーマは、「うわさにふりまわされて、飼っている犬のことを猫まただと思ってしまった僧（人間）のこっけいさ」だよ。

徒然草「奥山に猫またといふものありて」活用

テストでは「奥山に猫またといふものありて」の中で使われている言葉の活用に種類や活用形を聞かれることも多いので、確認をしておこう。

活用

使われている言葉の活用の種類と活用形を答えられるようにしておこう！

経上がり	ラ行四段活用（ら・り・る・る・れ・れ）連用形
更くる	カ行下二段活用（け・け・く・くる・くれ・けよ）連体形
希有に	終止形は「希有なり」ナリ活用の形容動詞連用形
暗けれ	ク活用の形容詞已然形

